

東京福祉大学赤城山宿泊研修の成果と課題 その1. 2年生の学生スタッフアンケート結果の分析

栗原 久^{*1}・古俣龍一^{*2}・佐々木貴雄^{*3}・幸喜 健^{*3}・荻野基行^{*3}・三野宏治^{*3}・岡村 弘^{*2}・
飯田昌男^{*3}・上村孝司^{*3}・北爪克洋^{*3}・小野智一^{*2}・石崎達也^{*2}・斎藤 瞳^{*4}・森 正人^{*1}・
斉藤雅記^{*1}・狩野晴香^{*5}・中嶋裕一^{*5}・金井孝博^{*6}・中嶋有沙^{*6}

*1 東京福祉大学 短期大学部・*2 教育学部・*3 社会福祉学部・
*4 心理学部・*5 総務課・*6 教務課(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町 2020-1

(2014年11月13日受付、2014年12月11日受理)

抄録: 東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)における学生スタッフ(2年生)を対象に得られた、活動の感想と反省に関するアンケート結果から、成果と課題について分析した。学生スタッフはレクリエーションワークの企画や実行に苦心したが、その活動によって1年生が喜んでくれたことに強い満足を感じており、研修を通して自己実現力の向上を意識して自信を深めたようである。もちろん、いくつかの問題点や改善点も指摘している。これらのアンケート結果は、赤城山宿泊研修の意義を強調するとともに、本研修が東京福祉大学の伝統行事として継続されることの重要性を示唆している。(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 東京福祉大学、赤城山宿泊研修、学生スタッフ、アンケート調査

緒言

文部科学省の2011(平成23)年度学校基本調査(文部科学省, 2011)によれば、2011年春の新規高卒者の大学と短大の進学率はそれぞれ47.6%、5.8%であり、専門学校を合わせると69.6%となり、進学先を強く選ばなければ全入の時代を迎えている。

高等教育環境の定員枠の拡大の増加に伴って持ち上がった問題の中で最も深刻なものが長期欠席、休・退学といった修学不調である。例えば、日本中退予防研究所(2010)は、大学生の8人に1人が中退していると報告し、その主要原因として、学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行、不本意入学が挙げられている。また、内田(2006, 2008)は、学生の休・退学、留年に理由として、①身体的疾患、②明確な精神障害、③大学教育路線から離れる消極的理由(スケジュールアパシー、勉強意欲の減退・喪失、単位不足、学外団体活動、アルバイトや趣味、専門学校などへの進路変更、就職など)、④大学教育路線上にあって学習向上のための積極的理由(海外留学、進路変更・他大学入学、履修科目上の都合、資格取得準備、就職再トライ、飛び級など)、⑤環境要因(経済的理由、家庭の都合、結婚・出産・育児、災害など)、

⑥不詳(一身上の都合、行方不明、調査不能など)の6種類に分類している。それらの中で最も頻度が高く、しかも対応が難しいものとして、③の消極的理由が指摘されている(内田, 2011)。

大学・短大・専門学校を消極的理由によって中退した者の多くが、その後フリーター・ニートとして過ごしていることから、大学に対して、入学させた学生の勉強意欲を維持し、休・退学、留年を予防する対策を講ずることが求められている。このようなニーズに対する解決策として、アカデミックアドバイザー(担任)を介する学生の修学・生活状況の把握とアドバイス、大学・学生・保護者との綿密な連絡体制、授業出席状況のチェックと欠席への対応、健康状態、特にメンタル面の不調に対する相談窓口の設置などが提言されている(厚生労働省, 2007; 文部科学省, 2011)。

大学に入ると、サークル・クラブの中では学生の交流が比較的密に行われている。しかし、サークル・クラブに参加していない学生は、授業は一緒に受けるものの、学生同士の交流には限界があり、孤立する傾向がないわけではない。また、学生と教員との交流も、事務的な面に限られている傾向が強い。一方、「同じ釜の飯を食う」といった諺があるように、教職員と学生とが宿泊を伴う活動を行うこと



写真1. 東京福祉大学伊勢崎キャンパスからみた赤城山

は、互いの交流を密にして、信頼感を深めることにつながる可能性が高い。

赤城山は群馬県を代表する山頂にカルデラを持つ大火山(標高1,828m、分布面積700km²、体積100km³)で(栗原, 2007)、広大な裾野を広げた姿を、東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)から望むことができる(写真1)。山頂には大沼(カルデラ湖)・小沼(火口湖)の2つの湖、覚満淵の湿原があり、ミズナラ、ダケカンバ、カエデなどの落葉広葉樹、群馬県花であるレンゲツツジの群生地として有名である。

東京福祉大学赤城山研修センターは2005年4月、赤城山山頂の大沼北岸の厚生団地地区(標高約1,370m)に開設された(写真2)。これを機会に、同年8月には、第1回東京福祉大学赤城山宿泊研修(以下、赤城研修とする)がスタートし、2014年には第10回を迎えた(栗原, 2010; 栗原ら, 2010; 栗原, 2013)。赤城研修は、第1回(2005年)～第10回(2014年)とも、1日目はレクリエーションワークとバーベキュー、2日目はハイキングとキャンプファイヤー、第3日目はレクリエーションと研修レポート作成を基本とするプログラムで構成されている。なお、雨天時は、バーベキューは中止、ハイキングについては短縮・コース変更または室内活動、レクリエーションは室内で実施可能な代替プログラム、キャンプファイヤーはキャンドルの集いに変更される。言うまでもなく、この赤城研修は、クラス・専攻を同じとする1年生同士およびアカデミックアドバイザー(担任)が、2泊3日の研修の中での交流を通して、互いを理解して絆を強めることを目的としている。

研修のスタート直後は、専門家の指導のもとにレクリエーションワークが行われ、第2回目からは、前年に赤城研修を経験した2年生学生が指導員の補助要員(学生ボランティアと呼ばれた)として、研修に参加した。しかし、この方式に対する反省から、2009年の第5回赤城研修から、レクリエーションの企画および1年生に対する指導の大部分



写真2. 東京福祉大学赤城山研修センター

を学生に委ねる方式となり、従来の呼称であった学生ボランティアから、学生スタッフに変更した。

赤城研修は本学にとって主要な行事であり、かつ学生スタッフを中心とする活動の実施は全国的にもユニークな取り組みである。そこで本報告は、第10回赤城研修(伊勢崎キャンパス)の終了にあたり、本研修をより一層充実させる目的で、学生スタッフのアンケートから意義と課題を分析した。

調査対象および方法

学生スタッフと活動の経過

第10回赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)の学生スタッフの学部・学科内訳は、社会福祉学部・社会福祉学科11人(男子4人、女子7人)、社会福祉学部・保育児童学科27人(男子13人、女子14人)、教育学部12人(男子5人、女子7人)、心理学部9人(男子3人、女子6人)の、合計59人(男子25人、女子34人)であった。

学生スタッフの募集と活動経過は以下の通りであった。
学生スタッフは、2014年4月の担当グループ振り分け後、それぞれが独自に、プログラム企画の活動を開始したが、具体化したのは5月8日のJS氏指導の事前研修①以降であった。

2013年12月	学生スタッフ募集
2014年1月	学生スタッフ確定・顔合わせ
2014年4月	学生スタッフ担当グループ振り分け・活動開始
2014年5月8日	事前研修① 1日(伊勢崎キャンパス:外部の専門講師によるレクレーションワーク指導)
2014年5月17・18日	事前研修② 1泊2日(赤城山頂:バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤーの実践、施設・設備の確認)
2014年5月	1年生へのオリエンテーション・班編成(第1回目)
2014年5月	しおり作成
2014年5月	1年生へのオリエンテーション・研修内容説明(第2回目)
2014年5月31日～6月12日	本研修(2泊3日:6グループ)

赤城山宿泊研修の参加者

1年生を対象にした本研修における各グループは、原則として同一学部・学科・専攻の1年生50～70人、そのアカデミックアドバイザー、赤城山宿泊研修実行専門部会員2人および補助教員1～2人、教務課事務職員2～3人、保健担当(外部委託の看護師)1人、および学生スタッフ9～11人で構成された。学生が少ない学科・専攻は複数を1つにまとめ、逆に多い学部・学科は分割し、グループの人数を調整した。そのため、平成26年度赤城研修(伊勢崎キャンパス)の各グループ構成人数の合計は、71～88人であった。

研修スケジュールは実施年、グループ間で若干の違いがあるが、基本的な流れは以下の通りである。

研修1日目

10:00	東京福祉大学(伊勢崎キャンパス) 出発(バス内で、学生スタッフ企画のゲーム)
11:30	赤城山頂到着・昼食
12:30	研修センター到着
13:00	開校式
13:30	レクレーションI(野外。雨天時は室内) (学生スタッフ企画)
15:15	チェックイン

16:00	夕食(バーベキュー)
19:30	アカデミックアドバイザーとの集い
21:00	リーダー会議
22:00	点呼・消灯・就寝

研修2日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
8:15	清掃
9:00	ハイキング・昼食(弁当)
18:00	夕食
19:00	キャンプファイヤー(雨天時はキャンドルの集い)(1年生企画のレクレーション活動あり)
21:00	リーダー会議
22:00	点呼・消灯・就寝

研修3日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
8:15	清掃
8:45	チェックアウト
9:00	レクレーションII(野外。雨天時は室内) (学生スタッフ企画)
11:00	研修レポート作成
12:00	昼食
12:45	閉校式
13:00	研修センター出発
15:00	東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)到着

学生スタッフアンケートの回収・分析

研修3日目、レクレーションIIと昼食の間の1時間の中で、1年生には赤城研修についてのレポート作成を、2年生の学生スタッフには研修に関する自己評価・反省を記述してもらった。

アンケートの質問内容は、以下の4項目で、それらはいくつかの細目に分かれていた。

- ①成功してよかったこと、失敗したこと、工夫したこと、努力したこと。
- ②自分自身の活動を振り返っての反省、感想
 - 反省
 - 感想
- ③次年度スタッフに対するアドバイス
- ④プログラム、学生指導、運営方法、食事等の感想・改善に向けての意見
 - プログラムの感想・改善
 - 学生指導の感想・改善
 - 運営方法の感想・改善

○食事の感想・改善

○その他の感想・改善

学生スタッフから回収されたアンケートの記述について、同類・同一意味の内容を集計した。

個人情報の保護

アンケート用紙には、学部・学科・専攻に関する項目はあった。しかし、記述内容の集計および分析において、個人名が特定されないこと、また、記述内容から、個人が利害を受けることのないよう配慮した。

結果

1. 研修の実施状況

各グループとも、遅刻・欠席は皆無であった。また、研修2日目に発熱のため途中帰宅した1年生1名を除いた全員が、2泊3日の研修を完了した。

写真3は、野外でのレクリエーション活動の例である。

研修スケジュールのうち、バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤーを全て予定通り実施できたのは1および2グループのみであった。3グループ以降は雨天が続いたため、バーベキューの中止、ハイキングの短縮コースへの変更、キャンプファイヤーからキャンドルの集いへの変更があった。

2. 学生スタッフのアンケート結果

2-1. 成功・失敗・工夫・努力したこと

表1は、学生スタッフ59人のアンケートに書かれていた、質問項目①の成功、失敗、工夫、努力したことについて、成功を挙げた人数の順にまとめたものである。

成功を挙げる人数が多かった項目は「レクリエーション」、「時間配分」、「キャンプファイヤー」で、これらの項目は

失敗および工夫においても人数が多かった。また、失敗は「体調面の配慮」が、努力は「レクリエーション」、「1年生への配慮・交流」を挙げる人数が多かった。

次に、質問項目②に対して学生スタッフが個人的に述べた反省の上位5項目は、「説明不足」(16人:27.1%)、「1年生とのコミュニケーション不足」(12人:20.3%)、「低い指導力」(10人:16.9%)、「時間配分の問題」(9人:15.3%)、「準備不足」(8人:13.6%)であり、表1の失敗、工夫、努力した項目と類似していた。

感想の上位5項目は、「楽しかった」(13人:22.0%)、「充実していた」(11人:18.6%)、「1年生とのコミュニケーションがとれた」(6人:10.2%)、「成長できた」(6人)、「感謝の気持ち」(5人:8.5%)、「参加できて良かった」(5人)と続き、表1の成功した項目と共通しており、肯定的な意見が多かった。

表1. 成功、失敗、工夫、努力した項目

項目	成功	失敗	工夫	努力
レクリエーション	32 (54.2)	23 (39.0)	30 (50.8)	17 (28.8)
時間配分	12 (20.3)	14 (23.7)	11 (18.6)	4 (6.8)
キャンプファイヤー	11 (18.6)	3 (5.1)	3 (5.1)	3 (5.1)
怪我の有無	7 (11.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
スタッフ同士の連携	6 (10.2)	6 (10.2)	7 (11.9)	8 (13.6)
1年生への配慮・交流	4 (6.8)	9 (15.3)	7 (11.9)	11 (18.6)
1年生同士の交流	3 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
野外炊事	2 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)
ハイキング	1 (1.7)	2 (3.4)	2 (3.4)	3 (5.1)
体調面の配慮	0 (0.0)	10 (16.9)	4 (6.8)	4 (6.8)
連絡	0 (0.0)	5 (8.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
注意事項の確認	0 (0.0)	3 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
雰囲気づくり	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (10.2)	7 (11.9)
指導力・方法	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)	2 (3.4)
天候不良への対応	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)
事前の準備	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)
しおりの作成	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。



写真3. 野外レクリエーションにおける学生スタッフのデモンストレーション(左写真)と指導(右写真)

2-2. 学生指導の反省・改善提案

表2は、学生指導に関連する反省および改善すべき項目をまとめたものである。

1年生のほとんどは未成年者であり、喫煙は許されない。もちろん、研修中は禁煙となっていた。しかし、喫煙する1年生がおり、その対応に苦労した様子がうかがえる。

2-3. 研修プログラムの感想・改善提案

表3は、研修プログラムに関連する感想および改善すべき項目をまとめたものである。

「プログラム通りが順調にいった」が最も多く(10人:16.9%)、上手くできなかったことおよび改善すべき項目についての指摘は少なかった。しかし、上手くできなかったことでは、「キャンプファイヤーができず残念」と「雨天時の対応をレクリエーションに頼りすぎた」をそれぞれ3人が、改善すべき項目に「雨天時の対応をしっかりと考えておく」を5人(8.5%)が挙げていた。

表2. 学生指導に関連する反省および改善すべき項目

上手くできたこと	
1年生が指示を聞いてくれた	3 (5.1)
「大きな拍手」が役立った	2 (3.3)
時間厳守の徹底	1 (1.7)
点呼の徹底	1 (1.7)
部屋での過ごし方についての指導	1 (1.7)
急な事態への対応	1 (1.7)
上手くできなかったこと	
禁煙指導が徹底できなかった	10 (16.9)
時間厳守を徹底できなかった	5 (8.5)
厳しい指導ができなかった	5 (8.5)
睡眠時間についての指導ができなかった	4 (6.8)
ごみの分別が徹底できなかった	3 (5.1)
分かりやすい説明ができなかった	2 (3.3)
服装への指導が徹底できなかった	2 (3.3)
スタッフ同士の衝突が多かった	1 (1.7)
改善すべき項目	
メリハリをつける	6 (10.1)
部屋での過ごし方について指導	4 (6.8)
1年生の見本になる行動	2 (3.3)
レクリエーションのメッセージ性を理解させる	2 (3.3)
班行動を徹底させる指導	1 (1.7)
喫煙への対応	1 (1.7)
スタッフの意思統一	1 (1.7)
規則違反の学生に対する対応のレクチャー	1 (1.7)
入浴時間についての指導	1 (1.7)
学生スタッフへの指導	1 (1.7)
スタッフによる状況把握	1 (1.7)
監視・巡回の増加	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

2-4. 運営方法への感想・改善提案

表4は、研修の運営方法に関する感想および改善すべき項目をまとめたものである。

表3でも示されたように、上手くできたことでは、「予定通り進んだ」が多く(9人:15.3%)、次いで「先生方が積極的に動いてくれた」(5人:8.5%)であった。一方、運営が上手くできなかったことの記述は少なかった。改善すべき項目の第1位は、「雨天時のタイムスケジュールをしっかりとの方が良い」(6人:19.2%)であった。

2-5. 引率体制・施設などへの感想・改善提案

表5は、引率体制・施設などへの感想および改善すべき項目をまとめたものである。

上手くできなかったことや上手くできたことの指摘は、比較的少なかった。一方、改善すべき項目は、個々の項目では件数は少なかったが、研修センターの施設・備品に関するものを合計すると11人(18.6%)となった。

表3. 研修プログラムに関連する感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
プログラム通り順調にいった	10 (16.9)
ハイキングの後の休憩時間が十分にあった	2 (3.4)
入浴の時間を多く取れた	1 (1.7)
プログラムが充実していた	1 (1.7)
時間で区切りながら進められた	1 (1.7)
上手くできなかったこと	
キャンプファイヤーができず残念だった	3 (5.1)
雨天時の対応をレクリエーションに頼りすぎた	3 (5.1)
予定通りいかなかった	1 (1.7)
ハイキングとキャンプファイヤーを同日にやるのは疲れる	1 (1.7)
就寝時間が遅くなってしまった	1 (1.7)
レクの時間が押した	1 (1.7)
1年生がしおりに目を通していない	1 (1.7)
時間に余裕が無かった	1 (1.7)
レクリエーションの時間が長すぎた	1 (1.7)
改善すべき項目	
雨天時の対応をしっかりと考えておく	5 (8.5)
入浴の時間を少し早くした方が良い	2 (3.4)
雨天時のハイキングの時間を短くした方が良い	2 (3.4)
キャンプファイヤーのクールダウンの時間に歌を入れた方が良い	1 (1.7)
雨天時用に工作ができると良い	1 (1.7)
バーベキューの時間を長くした方が良い	1 (1.7)
休憩時間を増やした方が良い	1 (1.7)
開校式は外で良かった	1 (1.7)
入浴の時間を長くした方が良い	1 (1.7)
通常と雨天時のプログラムをはっきり区別させた方が良い	1 (1.7)
雨天時用の体育館があった方が良い	1 (1.7)
ハイキングの後に入浴できるようにした方が良い	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

表4. 運営方法に関連する感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
予定通り進んだ	9 (15.3)
先生方が積極的に動いてくれた	5 (8.5)
時期的にちょうど良いと感じた	4 (6.8)
雨天時の対応ができた	3 (5.1)
ミーティングをしっかりとできた	1 (1.7)
1年生主体にできた	1 (1.7)
夜の引率者会議があつて良かった	1 (1.7)
上手くできなかったこと	
司会が上手くできなかった	2 (3.4)
レクリエーションが準備不足だった	1 (1.7)
緩い雰囲気をつくってしまった	1 (1.7)
リーダーと副リーダーに頼りすぎた	1 (1.7)
作業の分担が上手くできなかった	1 (1.7)
副リーダーの役割が少なかつた	1 (1.7)
入浴時間に関する説明が不足していた	1 (1.7)
鉄板掃除の確認が各班スタッフで良かった	1 (1.7)
1年生主体が徹底できなかった	1 (1.7)
1年生の班をランダムに振り分けて良かった	1 (1.7)
連絡ミスが多かつた	1 (1.7)
声かけが足りなかつた	1 (1.7)
改善すべき項目	
雨天時のタイムスケジュールをしっかりとした方がよい	6 (10.2)
スタッフは15分前行動くらいを心がけた方がよい	1 (1.7)
司会は台本を作った方がよい	1 (1.7)
1日目のレクリエーション後に備品の確認が必要	1 (1.7)
雨天時用の体育館があつた方がよい	1 (1.7)
メリハリが必要	1 (1.7)
スタッフと先生の念入りな対話が必要	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

2-6. 次年度の学生スタッフに対するアドバイス

表6は、次年度の学生スタッフに対するアドバイスをまとめたものである。

表1～表5で指摘された通り、「レクリエーションの予備種目の用意」(14人:23.7%)、「雨天時の対応を準備」(11人:18.6%)、「レクリエーションの練習」(8人:13.6%)、「選曲はみんなが歌えるものにする」(3人:5.1%)といった、レクリエーション関連のアドバイスが多かつた。

さらに、「1年生とのコミュニケーションを欠かさない」(11人:18.6%)、「1年生が主体となるように気をつける」(7人:11.9%)、「ハイキング中は1年生の行動に注意する」(5人:8.5%)、「一人ひとりに気を配る」(3人:5.1%)など、1年生に対する学生スタッフの気配りが多く挙げられた。さらに、「ミーティングをきちんと行う」(11人:18.6%)、「スタッフ同士で情報を共用する」(7人:11.9%)と、密な情報交換と意思疎通の重要性の指摘が多かつた。加えて、「時間の余裕をもって行動する」と「体調管理に注意する」(いずれも9人:15.3%)も多かつた。

表5. 引率体制・施設などへの感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
先生方に感謝	3 (5.1)
スタッフ同士仲良くなれた	2 (3.4)
1年生が楽しんでくれると嬉しい	2 (3.4)
1年生と仲良くなれた	1 (1.7)
勉強になった	1 (1.7)
キャンドルサービスは感動した	1 (1.7)
レクリエーションを盛り上げられた	1 (1.7)
上手くできなかったこと	
1年生とコミュニケーションを取れなかつた	1 (1.7)
鉄板のチェックが厳しすぎる	1 (1.7)
スタッフの睡眠時間が短かつた	1 (1.7)
改善すべき項目	
防虫対策をして欲しい	2 (3.4)
洗面所の網戸が破れていた	2 (3.4)
研修室をもっと快適にして欲しい	2 (3.4)
スタッフ同士のコミュニケーションは大切である	2 (3.4)
雨天時の掃除場所について先生方の意見が知れたかつた	2 (3.4)
プログラムをもっと早く知れたかつた	2 (3.4)
日程調整が必要	2 (3.4)
雨天時の体育館が必要	2 (3.4)
風呂を増設した方がよい	1 (1.7)
個室の風呂が汚い	1 (1.7)
そば製の枕はやめた方がよい	1 (1.7)
臨機応変に対応できるようにする	1 (1.7)
野外炊事の際に薪や炭を入れすぎない方がよい	1 (1.7)
しおりの内容を変えた方がよい	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

考察

赤城研修は、東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)の新1年生を対象に2005年に開始され、2008年には池袋キャンパスの学生、2011年には池袋日本語別科(留学生)学生、2012年からは名古屋キャンパスの学生・日本語別科学生を対象にした研修も始まり、全学的な取り組みが完成した。学生および引率教職員を合わせると、参加人員は1,400人を越え、東京福祉大の最大の行事として定着している。2014年の伊勢崎キャンパスの研修は10回目の記念となったが、これを象徴するのが、学長、副学長、学部長が、全日程あるいは部分日程で参加したことであろう。

本研修は、教職員が学生を引率して、あらかじめ決められたスケジュールで研修を行うのではなく、研修プログラムの基本線は設定されているものの、その範囲で学生スタッフが主体となって自由に研修内容を企画・実施することが可能である。大学が行う新入生対象の宿泊研修のほとんどは、新入生同士および教職員間との意思疎通を図るこ

表6. 次年度の学生スタッフに対するアドバイス

レクリエーションは予備を多めに用意した方がよい	14 (23.7)
雨天時の対応を準備しておく	11 (18.6)
ミーティングをきちんと行う	11 (18.6)
1年生とのコミュニケーションを欠かさない	11 (18.6)
時間に余裕を持って行動する	9 (15.3)
体調管理に注意する	9 (15.3)
レクリエーションは練習の数をこなす	8 (13.6)
スタッフ同士で情報を共有する	7 (11.9)
1年生が主体になるよう気をつける	7 (11.9)
ごみの分別を徹底する	6 (10.2)
ハイキング中は1年生の行動に注意する	5 (8.5)
入浴時間は周知させる	5 (8.5)
準備には早く取り掛かる	5 (8.5)
しおりの作成に時間がかかるので注意する	5 (8.5)
ルールを徹底する	3 (5.1)
選曲はみんなが歌えるものにする	3 (5.1)
麦茶はこまめにチェックする	3 (5.1)
一人ひとりに気を配る	3 (5.1)
お菓子を多めに持っていく	2 (3.4)
早い就寝を心がける	2 (3.4)
しおりは熟読させる	2 (3.4)
タイムキーパーを決めておく	2 (3.4)
配膳担当を決めた方がよい	2 (3.4)
鉄板をきれいにする	2 (3.4)
大きい声を心がける	2 (3.4)
忘れ物に注意する	1 (1.7)
スタッフで統一のTシャツを着ると統一感が出てよい	1 (1.7)
つなぎの色は霧の中でも目立つ色にする	1 (1.7)
スタッフの仕事量は平等にする	1 (1.7)
来たくないと思っている子もいることを忘れない	1 (1.7)
起床時間に放送を流す方がよい	1 (1.7)
ファブリーズを持って行った方がよい	1 (1.7)
消灯後の巡回を定期的に行う	1 (1.7)
時計を必ず身に付ける	1 (1.7)
困ったことがあればすぐ先生に相談する	1 (1.7)
上履きをきちんと履くように指導する	1 (1.7)
チェックアウト時の片付けを徹底する	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

とを目的とするものである(目黒ら, 2005; 佐伯ら, 2008)。しかし、学生主体のプログラム企画が行われる東京福祉大学における宿泊研修は、全国的にもユニークな取り組みであるといつてよい。

東京福祉大学の建学の精神は、「Academic and Practical: 理論的・科学的能力と実践応力を統合し、柔軟な思考力と問題発見・解決能力のある人材を育成する」である。赤城研修の学生スタッフとして参加した福祉・教育・心理職を目指す学生にとっては、日々変化する自然環境の中での活動

体験を通して、柔軟な対応力、学生スタッフ同士および1年生との仲間作り、1年生・教職員とのコミュニケーション能力の醸成、思いやりと互助精神の高まり、環境保全への意識向上に役立つはずである。さらに、2年生の学生スタッフの活動を実感することで、1年生は成長する自分の将来像を予測し、自己実現力の向上に役立てることができるはずである。まさに、赤城研修は、本学の建学の精神を具現化する場であると言っても過言ではない。

これらの点を念頭において、次年度以降の赤城研修をさらに有意義に進めていく目的で、本報告では、主に4項目からなる質問に対する学生スタッフのアンケート結果を集計し、分析した。

第1の『成功・失敗・工夫・努力したこと』では、いずれもレクリエーションに関連するもので、学生スタッフがレクリエーション活動に重点的に取り組んでいたことがうかがえる。この点については、学生スタッフ向けに、5月6日に伊勢崎キャンパスで実施した、レクリエーションワークの専門指導者による事前指導を非常に熱心に受けていたこと、および赤城山頂にて5月18・19日の1泊2日で行った事前研修においても、学ぶ姿勢が強く感じられたことが挙げられる。また、学生スタッフは、昨年度は1年生として研修に参加して先輩の活躍を目にしており、1年生とのコミュニケーションを図って、よりよいレクリエーション活動をしようにする意気込みを持って、スタッフに応募したことが考えられる。その結果が、成功裏に終われば、楽しかった、充実していた、成長できた、感謝の気持ちといった肯定的な気持ちにつながったと考えられる。一方で当然のことであるが、高い目標を持てば持つほど自己評価は厳しくなる。このことが、説明不足、コミュニケーション不足、指導力不足、時間配分の問題、準備不足の回答が多かったことにつながったと思われる。

第2の『学生指導の反省・改善提案』はおおむね良好といえるが、集団生活を円滑に行うため、ルール遵守の指導力を高めること、およびメリハリをつけることに学生スタッフが苦労した様子を示している。特に、喫煙の問題が気になるところである。1年生のほとんどは未成年者であって喫煙は許されず、研修中は禁煙となっていた。しかし現実には、本研修に参加した1年生に対する入学直後の2014年4月に実施した喫煙率調査では、男子学生が8.4% (30/239人)、女子学生が8.2% (27/330人)であり(栗原, 未発表データ)、喫煙率は私立大学1年生の平均値5.6% (社団法人日本私立大学連盟, 2011)よりかなり高い。喫煙に対する指導を学生スタッフに任せることには限界があり、そもそもこれは赤城研修だけの問題ではない。日頃の授業が行われるキャンパス内を含めた、全学的な取り組みが必要である。

第3の『研修プログラムの感想・改善提案』、および第4の『運営方法への感想・改善提案』では、『成功・失敗・工夫・努力したこと』でも挙げられたが、いずれも研修プログラムの実施に関する項目が多かった。また、3グループ以降の研修では、雨天によりプログラム変更が余儀なくされたことを反映している。天候不順時はやむを得ないが、それへの対応を綿密に準備することの重要性を示している。

第5の『引率体制・施設などへの感想・改善提案』はおおむね良好といえる。いくつかの問題点はあったものの、赤城研修そのものの日程については、2005年～2014年の10回にわたる研修を通しておおむね順調に実施されてきた。しかし、赤城山研修センターの施設・備品に関するものを総合すると、問題点がないわけではない。例えば、2005年の赤城研修は、水道施設の故障による中断(後日、不足分を実施)・延期を余儀なくされ、2011年3月の東日本大震災では、研修センター建物東側の土留めのコンクリートにひび割れが発生した。さらに、2014年は実習開始前に空調用ラジエーターの配管から水漏れが発見された。これらは、赤城山頂の標高1,370mの地にあつて、周囲を山林に取り囲まれた研修センターの立地条件にもよるところが大きいが、施設の老朽化や構造上の問題が関係しており、大学側として対応すべき課題である。施設に関する赤城研修学生スタッフのアンケート結果としては、件数は少なかったが、本研修の様々な面を浮き彫りにしており、対応を図る必要があるといえる。

また、学生スタッフアンケートでは触れられていないが、国際化を見据えて留学生の受け入れを進めている本学において赤城研修を全学的に取り組むためには、このような施設・運営面の配慮に加えて、アレルギー、障害、医療的配慮の必要な学生、外国人など食事等に配慮が必要な学生の増加への対応も十分でなく、早急に整備すべき重点項目の一つである。

最後に『次年度の学生スタッフに対するアドバイス』では、すでに指摘された通り、レクリエーションに関連する項目、人間関係の構築、密なコミュニケーション、安全・健康管理が多かった。これらのアドバイスは、レクリエーション種目はとすると、晴天時の野外活動を想定して企画しがちであるが、雨天時に室内でも実施可能な種目を準備することの重要性を指摘するものである。加えて、スタッフ内のチームワークや1年生との交流・配慮など、研修スタッフ(引率者)としての意識を高めることの大切さも指摘している。これらの点については、外部講師の事前指導でも強く強調されていることであり、学生スタッフはこの時点で強く認識したと思われる。もちろん、

これらアドバイス事項の大部分は、学生スタッフによる研修プログラムの企画と実践の中で浮かび上がってきた様々な問題点、およびそれらへの対応と解決の経験を強く反映したものであり、次年度の研修において、学生スタッフのみならず、引率する教職員にとっても大いに指針になる。

なお、学生スタッフ、1年生および引率教員における赤城山宿泊研修に対する思いについては、Voyage 大海へ(東京福祉大学広報誌)に掲載された座談会(栗原ら, 2010)が参考になる。

高等教育環境の中で持ち上がってきた問題で深刻な長期欠席、休・退学といった修学不調の主要原因として、学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行、不本意入学といった消極的理由が挙げられている(内田(2006, 2008, 2011))。2泊3日の赤城研修を通して、学部・専攻・クラスを共にする学生が先輩・教職員と一緒に野外活動・レクリエーション活動を行った経験は、学生間および学生と教職員間の絆を深め、修学不調の防止に役立つことが期待される。さらに、赤城研修の経験は、在学中はもとより、卒業後も大学生活のよき思い出として一生残るはずである。これらの点こそ、赤城研修が東京福祉大学の伝統行事として正のスパイラルを描いて継続されている原動力であるといえる。

今後は、研修に参加した1年生のアンケートの精査・分析を通して、よりよい研修の実施策を検討していきたい。

結論

平成26(2014)年度赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)が、記念すべき第10回を迎えたことから、引率教職員とともに研修実施の中心的役割を果たした学生スタッフのアンケート結果をもとに、研修の意義と課題をまとめた。

学生スタッフは、レクリエーションワークの企画や実行に苦心しつつも、その成果に強い満足を感じ、かつ自己実現力の向上に自信を深めたようである。次年度のスタッフへのアドバイスとして、研修について失敗した事項や改善点も指摘している。本調査で得られた学生スタッフのアンケート結果では、研修の指導経験を通して、自らの資質を高めようとする姿が浮き彫りにされた。

謝辞

平成26年度 東京福祉大学(伊勢崎キャンパス) 赤城山宿泊研修にご参加・ご協力いただいた全教職員に深謝いたします。

文献

- 厚生労働省(2007): ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究. 厚生労働省, 東京.
- 栗原 久(2007): なるほど赤城学 ―赤城山の自然、歴史・文化―. 上毛新聞社, 前橋.
- 栗原 久(2010): 赤城山宿泊研修の意義 ～実行専門委員会委員長の談話～. *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2010. 春夏合併号**, 1.
- 栗原 久・佐々木貴雄・春原路人ら(2010): 赤城山宿泊研修教員・学生座談会. *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2010. 春夏合併号**, 2.
- 栗原 久(2013): 赤城山宿泊研修 全学的取り組みの完成!! *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2013. 夏号**, 1.
- 目黒 力・北川公路・江口勝彦ら(2004): 理学療法学科新入生宿泊研修における教育効果 ―学生・教員アンケート結果からの考察―. 群馬パース学園短期大学紀要 **6**, 53-60.
- 文部科学省(2011): 平成23年度学校基本調査. 文部科学省, 東京.
- 日本中退予防研究所(2010): 中退白書 2010. NEWVERY, 東京.
- 佐伯英人・石原高志・二橋正宏ら(2008): 集団宿泊的行事の教育効果に関する研究 (II). 国立青少年教育振興機構研究紀要 **8**, 25-35.
- 社団法人日本私立大学連盟(監修)(2011): 私立大学学生生活白書 2011. 社団法人日本私立大学連盟学生委員会額生活実態調査分科会, 東京, pp12-15.
- 内田千代子(2006): 国立大学の休・退学、留年学生および志望に関する調査 ―精神科医から見たサポートの必要性―. 国立大学マネジメント **2**, 27-32.
- 内田千代子(2008): 大学生における休・退学、留年学生に関する調査 第28報. 「休・退学、留年学生調査」事務局(茨城大学保健管理センター内), 水戸.
- 内田千代子(2011): 大学生における休・退学、留年学生に関する調査 第31報. 「休・退学、留年学生調査」事務局(茨城大学保健管理センター内), 水戸.

The Results and Issues of Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare (Iseaki Campus)

1. Analyses of the Questionnaire Answers from the Student Stuffs of Second Grade

Hisashi KURIBARA ^{*1}, Ryuichi KOMATA ^{*2}, Takao SASAKI ^{*3}, Ken KOKI ^{*3}, Motoyuki OGINO ^{*3},
Koji MINO ^{*3}, Hiroshi OKAMURA ^{*3}, Masao IIDA ^{*3}, Takashi KAMIMURA ^{*3}, Katsuhiro KITADUME ^{*3},
Tomokazu ONO ^{*2}, Tatsuya ISHIZAKI ^{*2}, Hitomi SAITO ^{*4}, Masato MORI ^{*1}, Masaki SAITO ^{*1},
Haruka KANO ^{*5}, Yuichi NAKAJIMA ^{*5}, Takahiro KANAI ^{*6} and Arisa NAKAJIMA ^{*6}

^{*1} Junior College, ^{*2} School of Education, ^{*3} School of Social Welfare,

^{*4} School of Psychology, ^{*5} Department of General Affairs and

^{*6} Department of School Affairs, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this research was to find out the results and problems of Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare at Mt. Akagi from the questionnaire answers of the student stuffs of second grade. The stuffs tried to do the best performance in the recreation works, although there were many difficulties. Of course, they also pointed out many items which should be improved. The effort of student stuffs results in satisfaction, promotion of confidence and self-realization. These questionnaire answers emphasis the meaning of summer seminar, and present important suggestions for endurance of this activity as the traditional event of Tokyo University of Social Welfare.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

Key words : Tokyo University of Social Welfare, Summer Seminar at Mt. Akagi, Student stuffs, Questionnaire